

満たされぬ想い

お日さまが山間から俗世を照らし

私の日輪の輝きはかすむ

初夜の火炎はいずこへ

あの日の想いは天に帰した

深淵なる虚無を埋められず

私は一人さまよい彼と会う

麝香の香りが鼻腔をつく空間で

私はあなたを知る

それは本当のあなたではない

肢体を着飾り

花の都を歩いても高閣の輝きはむなしくて

美食の味わいも、心ここにあらず

私の想いはいずこへ

私の想いはいずこへ

一滴の涙が目尻から頬を伝い、地を濡らす

彼女は着飾ります。

彼女は着飾りますが、ダイヤ、プラチナの輝きは、

涙を知った大地は、

晩夏の風に吹かれ渴きをおぼえる

深淵な器を満たせるのはあなただけ

この大炎が燃え尽きる前に

私はもう一度あなたを知りたい

私はもう一度あなたを知りたい

解説

この詩は、ある女性が結婚まで考えていた男性を失い、その埋められない心の叫びを表現したもので、季節は、夏の終わり、年齢は20代後半、結婚ラッシュに乗り遅れまいと、必死さを心に抱えていた女性です。彼女は、彼氏を失つてから別の男性と知り合います。しかし、彼では彼女の心にぽつかりあいた穴を埋めることができないので、その後はリッチな方です。世界中のどこへでも彼女を連れて行き、おいしい食事を紹介します。しかし、彼女の心は沈んだままです。

都市の夜景のごとく、はかなく、到底彼女のこころを満たすことはできません。本当の彼と過ごした日々が、一步踏み出すたびに思い起されます。

乾ききった彼女の心から絞り出たのが、涙です。その涙は大地に落ちますが、夏の風に吹かれすぐ乾きます。まるで彼女の心のように。彼女が必要としている唯一のものは本当の彼なのです。

斎藤 瑞生
外国語学部
国際文化交流学科4年